宇都宮大学教授
文学博士
松田武夫著

古今集の構造に関する研究

風間書房刊

昭和40年 9 月15日　印刷
昭和40年 9 月20日　発行

古今集の構造に関する研究

定価　四、五〇〇円

著者　松田武夫

発行者　風間歳次郎

印刷所　暁印刷株式会社

発行所

株式会社　風間書房

東京都千代田区神田神保町一の三四
電話東京(二九一)五七二九番
振替　東京一八五三番

(文部省助成学術書)

目次

緒言……一
序論……二
創造主体と古今集……二
古今集の作品主題……一六
古今集の集合性……二三
部立論……二九
歌合の面からの考察（二九）　私撰集の面からの考察（三三）　古今集の部立（三六）　部立の性格（三八）
部立の分化（四一）　部立の名称（四三）
部立の内部構造……四六
本論……五三
第一編　古今集両序の構造論……五三
第一章　仮名序の構造論……五四
第一節　従来の構造論……五四

親房の所論（一五五）　契沖の段落（一五九）　鳥居忱の構造論（一六三）　了誉の構造論（一七四）……一八四
第二節　仮名序構造論の結論……一一〇
第二章　真名序の構造論……一一四
第三章　両序の特殊性と構造論の意義……一一四
第一節　両序の特殊性……一一四
第二節　構造論の意義……一一三
第二編　古今集本文の構造論……一一五
第一章　春歌の構造……一一五
第一節　春歌の時期的区分と主題……一一六
第二節　主題を中心にした一月の構造……一一五
立春（一五〇）　雪（一六二）　鶯（鳴く前の鶯　鳴く鶯）（一六七）　若菜（一七一）　霞（一七五）　緑（一七六）
柳（一七六）　百千鳥（一七七）　呼子鳥（一七八）　帰雁（一七九）　梅（咲く梅　散る梅）（一八〇）
第三節　主題を中心にした二月の構造……一八六
前半の咲く桜（一八七）　前半の散る桜（一九八）　後半の咲く桜（二一一）　後半の散る桜（二一六）
第四節　主題を中心にした三月の構造……二二一
藤（二二一）　山吹（咲く山吹　散る山吹）（二二二）　逝く春（二二四）
第二章　夏歌の構造……二二一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第一節　主題を中心にした四月の構造……二三三
第二節　主題を中心にした五月の構造……二三五
　鳴き初める郭公（二三六）　鳴く郭公（二三七）
第三節　主題を中心にした六月の構造……二四五
第三章　秋歌の構造……二四八
第一節　主題を中心にした七月の構造……二五一
　立秋（二五二）　秋風（二五三）　七夕（待つ七夕　会ふ七夕　別れる七夕）（二五四）　かなしき秋（二五八）
　秋の夜（二六〇）
第二節　主題を中心にした八月の構造……二六一
　秋月（二六二）　秋の虫（二六五）　雁（二六九）　鹿（二七二）　萩（二七五）　露（二七七）　女郎花（二七八）　藤袴（二八五）
　薄（二八六）　撫子（二八八）　百草の花（二八八）　月草（二八九）　秋の野（二九〇）
第三節　主題を中心にした九月の構造……二九一
　秋の草木（二九二）　前半の紅葉（色づき初める紅葉　色づいた紅葉）（二九四）　菊（三〇〇）　後半の紅葉
　（散る紅葉）（三〇四）　山田（三一一）　逝く秋（三一三）
第四章　冬歌の構造……三一八
第一節　主題を中心にした十月の構造……三一九
　時雨（三二〇）　冬の山里（三二一）　氷（三二三）

第二節　主題を中心にした十一月の構造……三三
初雪（三三）　降りしきる雪（三三四）
第三節　主題を中心にした十二月の構造……三三七
雪中待春（三三八）　雪中梅花（三三九）　年の暮（三三一）
第五章　賀歌の構造……三三五
第六章　離別歌の構造……三五五
第七章　羇旅歌の構造……三七六
第八章　物名の構造……三九二
「物名」の名称と物名歌（三九二）　物名の構造（鳥虫・植物名）（三九六）　地名・雑名（四〇八）　墨滅歌の考察（四一四）
第九章　恋歌の構造……四三一
第一節　恋歌一の構造……四三〇
六歌仙以後の歌（四三一）
忍ぶ恋（四三二）　もの隔てたる（四三三）　見ぬ人（四三四）　見てし人（四三五）　聞く恋（四三六）
読人不知の歌（四三八）
初恋（四三八）　恋ひぬ日はなし（四三九）　河に寄す（四四〇）　花に寄す（四四一）　鳥に寄す（四四二）　夏に寄す（四四三）　恋の乱れ（四四四）　人知れぬ（四四四）　海に寄す（四四五）　心の悩み（四四六）　夜の恋

(四四七)　恋ひや死ぬ　(四四七)　つれなき人　(四四八)　夢に見えず　(四四九)　篝火に寄す　(四五〇)　水に寄す　(四五一)　山に寄す　(四五二)　関に寄す　(四五三)　知らぬ人　(四五三)　人に知らせむ　(四五四)　春に寄す　(四五五)　夏虫に寄す　(四五五)　秋に寄す　(四五五)　雪に寄す　(四五六)

第二節　恋歌二の構造……四五九

小野小町関係の歌　(四六〇)

夢に見る　(四六一)　玉に寄す　(四六一)

寛平御時后宮歌合の歌　(四六二)

夢の通ひ路　(四六二)　草に寄す　(四六三)　夏虫に寄す　(四六三)　霜に寄す　(四六四)　藻に寄す　(四六五)

雪に寄す　(四六五)　君恋ふる　(四六六)　恋ひわぶ　(四六六)　涙に寄す　(四六七)

題不知の歌　(四六八)

夢に見る　(四六九)　涙の袖　(四六九)　郭公に寄す　(四七〇)　秋に寄す　(四七一)　真菰に寄す　(四七二)　桜に寄す　(四七三)　川に寄す　(四七四)　夜に寄す　(四七五)　山路に寄す　(四七六)　紅涙に寄す　(四七六)　夏虫に寄す　(四七七)　つれなき人　(四七七)　人知れぬ恋　(四七八)　見はてぬ夢　(四七九)　弓に寄す　(四八〇)

不会恋　(四八一)

第三節　恋歌三の構造……四八五

会はずして帰る　(四八六)　無き名立つ　(四九〇)　されど通ふ　(四九一)　相会ふ夜　(四九三)　きぬぎぬの思ひ　(四九四)　夢かうつつか　(四九五)　あひ見る　(四九八)　浮き名立つ恐れ　(四九八)　衣に寄す　(四九九)　夢路に通ふ　(五〇〇)　人目つつみ　(五〇二)　人に知られぬ　(五〇二)　色に出でぬべし　(五〇四)　浮き名立つ　(五〇五)

第四節　恋歌四の構造……五〇八
相見る恋（五〇九）　変らぬ恋（五一一）　待つ恋（五一二）　とはにあひ見む（五一三）　熱愛（五一五）　言しげくとも（五一六）　心変りを恨む（五一七）　飽かずして別る（五一二）　深き心（五一二）　心知れず（五二四）　身をば離れず（五二五）　昔の人への恋（五二六）　えにし絶ゆ（五二八）　無情な往き来（五二九）　恋の形見（五三一）
第五節　恋歌五の構造……五三四
昔を恋ふ（五三五）　いとはるる身（五三七）　涙に濡るる（五三九）　来ぬ人（五四〇）　忘草に寄す（五四二）　夢に見ず（五四三）　人待つ宿（五四四）　たのむる（五四五）　人を待つ（五四六）　移りゆく心（五四八）　野に寄す（五五一）　川に寄す（五五二）　色に寄す（五五四）　花に寄す（五五四）　忘草に寄す（五五六）　憂しと思ふ（五五七）　われからと思ふ（五五八）　人に知らるる（五六〇）　わびはつる時（五六二）　恨むわが身（五六三）　心の秋（五六六）　仲絶えて年経る（五六八）　あきらめ（五七〇）
第六節　恋歌全巻の構造……五七四
第十章　哀傷歌の構造……五八〇
送葬時の歌（五八二）　服喪中の歌（五八六）　追悼の歌（五九〇）　辞世の歌（五九五）
第十一章　雑歌上の構造……五九九
雑（六〇一）　月（待つ月　照る月　隠れる月）（六〇八）　老（六一三）　水（六一九）
第十二章　雑歌下の構造……六二九
厭世（六三〇）　遁世（六三三）　厭世（六三七）　遁世（六四六）　漂泊（六四八）　献白（六五一）

第十三章　雑体の構造……六五四
短歌（六五七）　旋頭歌（六五七）　誹諧歌（四季歌　恋歌　雑歌）（六五八）
第十四章　大歌所御歌の構造……六七三
大歌所御歌（六七八）　神遊歌（六八一）　東歌（六八八）　祝言の歌（六九三）
結　論……六九七

緒言

一

日本文学研究史上、古今集は、源氏物語・伊勢物語とともに、平安朝末期から現代に至るまで、極めて多くの研究者によつて研究された古典である。清輔・定家などによる本文校訂、顕昭注・教長注などに始まる注釈的研究、俊成の古来風体抄、定家の近代秀歌等における古今集の歌論と歌風に対する批判から、中世期・近世期を経、明治以降今日に至るまで、その研究は、連綿として、いにしへ今を貫いてゐる。大正年代以降、国文学研究が近代科学的研究法を取り入れた後においても、本文研究・注釈的研究・歌論的研究・批評的研究は盛んに行なはれ、見るべき成果が数多く公表された。「古今集の伝本の研究」（西下経一著）、「古今和歌集成立論」（久曾神昇著）などは、古今集の本文研究に関する最近の成業であり、「古今和歌集評釈」（金子元臣著）以来、日本古典文学大系所収の「古今和歌集」（佐伯梅友校注）に至るまでの諸家の全注乃至抄釈は、注釈的研究の努力の結集である。古今集の歌論・歌風に関する纒つた研究は、著書の形態を取るに至つてゐないが、「日本文学評論史」（久松潜一著）から、輓近の「日本歌論史の研究」（久松潜一著）に至るまでの時期において、太田青丘・小沢正夫博士その他の研究家によつて、雑誌紀要等の論文、あるひは著書中の一部分において、それぞれの研究が発表されてゐる。又、「国文学全史（平安朝編）」（藤岡作太郎著）以来、「日本文学史（中古）」（至文堂刊）に至る諸文学史の類、「新講和歌史」（児山信一著）をはじめ、生田蝶介（日本和歌史）・

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

西下経一（和歌史論）・久松潜一（和歌史）・太田水穂（日本和歌史論）諸氏の和歌史研究においても、研究の成果が表示されてゐる。

これら近代の古今集研究は、各々の立場と目的と方法とによつてなされたもので、それぞれ、古今集の研究として意義深いものがある。

二

古今集の研究において、文献学的・注釈的・歌論的、あるひは文学史・和歌史的研究と、各々研究の相貌は変つてゐても、それは、古今集の本文を観察し思考する角度の相違に過ぎなく、古今集そのものを度外視しては、存在しないものである。

そこで、古今集本文自体の文献学的研究が、頗る基礎的な下部構造的な研究としてなされることも承認される。しかし、かうした研究は、客体としての古今集本文の、文献に基づく科学的実証的な見方と態度を取るの余り、古今集本文に対する認識を、機械的ならしめ、本文に対する思考の中から、人間的思惟や判断や行為を、締め出す弊に陥り易い。古今集のみならず、古典文学作品の総ては、人間的創作主体によつて創造され、それが、後代の受容伝承者により、継承されてゐる事実を忘れ勝ちである。

今日、古今集は、たしかに、一つの文献として伝承されてゐるが、その原初においては、古今集の撰者といふ人間的主体によつて創作されたものである。それが、十世紀もの時間を経過した今日においては、一見、生命を喪失した

化石の如き印象を研究者に与へるに至つたが、文献としての古今集本文の背後には、それを制作した人間的主体と、その時代的背景とが、脈打つてゐる。このことは、古今集の注釈的研究、歌論・歌風的研究においても同様にいへることで、古今集作製者の方法と意図を確かめることなく、研究作業を行なふことは妥当でない。

古今集の撰者たちは、当時の宮廷と貴族生活のただ中に棲息し、漢学を修め、和歌の道に精進し、摂関政治の官僚組織の中に身を置き、身分と経済の安定をその人なりに保証されてゐた。従つて、これら歌人の思考や情念は、貴族意識に貫かれ、花鳥風月に心を動かし、愛恋の悲傷に呻吟し、長寿を祝福し老年を厭ひ、生別死別の悲しみに涙を流し、この世の無常に心を痛めるたぐひのものであつた。さうした平安貴族の情意の基盤に根ざした古今集の本文であるといふことを、念頭に置くか置かないかによつて、古今集に対する認識の仕方が異つて来る。即ち、客観的に古今集を眺めた場合、古今集は、まさに個々の歌の並列的集団として受け取れるのに反し、古今集は、創作主体としての撰者の思考による構造的有機体として、認識されるやうになつて来る。従つて、古今集を、撰者の主観の全体を意図的に表現した、統一体として認めざるを得なくなる。換言すれば、古今集は、個々の和歌を編集し統一することによつて、撰者自らの情意的世界を表現したものとなる。かうなると、古今集の本文批評の場合においても、伝本事実を判断する基準が、そこに置かれるやうになり、注釈研究の場合においても、注釈者自身の独断でなく、撰者の意志の尊重といふ点に、判断の基底が求められるやうになる。つまり、古今集は、解釈・鑑賞・批評等の操作によつて、受容する者の側にのみ在るものでなく、これを創造した撰者側にも、認識の立場があるとする考へに立つことになる。かうした見方考へ方は、既に、拙著「金葉集の研究」「詞花集の研究」以来、堅持し来たつたものであるが、本研究に

おいても、この考へを基底とし、その上に立つて、古今集の構造を明確にせんとするものである。

三

古今集を、撰者の編集的行為による創作物とした場合、撰者は、個々の和歌を、集合・転移・分類・排列の手法によつて、一つの集に纒めあげることが想像される。

この編集手法の第一過程に当る集合・転移過程において、撰者は、古今集全体の構想を基礎に、個々の和歌を選別し、それらを、個々の出典から撰者の手もとに転移させ、集合を計る。その場合、撰者の意識の中には、新しい歌集を作るにふさはしい、撰者の選択眼に適つた歌を採用するといふこと、豫め考へられた部立の範疇内に入れ得る種類の歌を集めること、さうして又、如何なる時代の歌を集録するか、といふことなどの思考が働く。即ち、撰者の鑑別によつて、ある種の傾向を帯びた歌が集合される最初の段階において、一つの歌集の歌風の基本が生じ、後の完成過程において、それが更に確実なものとされる。又、部立の範疇に入る歌を集合する操作にともなひ、和歌の種類が自ら限定され、時代を考慮に入れることによつて、採択される和歌の時間的制約が自然に生じて来る。だから、古今集の場合、その歌風は、自然発生的な物理的現象でなく、撰者の主観に基因する人為的所産と見ることが可能である。又、古今集に集載された和歌の種類には、自ら限界があるが、これ又、撰者の主体的判断によるものとすることが可能である。更に又、古今集編纂の当初、万葉集に入らぬ古き歌と、延喜当代の歌とを採用するといふ時間的制限を設けたために、約一世紀間の和歌が必然的に集合され、それ以外の時代にわたることを得なかつた。このやうに、古今

集における歌風や、制限された和歌の種類や時代は、特徴ある現象と見られるが、その由つて来たるところは、いづれも、編集主体の意志に存するのである。

集合・転移過程を過ぎ、分類の段階に入ると、先決問題として、部立の決定が、撰者の考へによつてなされなければならない。部立の決定は、採用歌の種類とその領域の限界を来たすが、それは、撰者の脳裡に存在する和歌の世界の反映と見ることが出来る。部立といつても、その間に自ら軽重があり、主要部立と暫定的部立との区別も考へられ、又、これらの部立を二十巻に配布する順序等も、撰者の意を用ひた点である。このやうに、すべてが、撰者の意志決定に待つものと思念した場合、古今集の本文は、決して化石的存在でなく、撰者の主観が息づく生存的存在と見なされるのである。

集合され、部立別に分類された状態においては、今見る古今集の容態をなさないが、次の段階において、各部立の内部を組織立て、秩序あるものに人為的に編成する作業が、必要とされる。この作業が綿密周到であればあるほど、部立内部は、整然と組織化され、一つの構造を持つに至る。その構造組織の創造は、総て、撰者の思考によつて、遂行され実現される。

古今集を、かうした創作過程において把握し、その間に働いた撰者の意図を明らかにすることの可能性の追求は、当然、なされるべき研究営為であるが、今日まで、それを試みた学者は存在しなかつた。本研究においては、以上の如き考へに立脚し、古今集の撰者たちが、編集の実務作業中、最も苦心を払つたと思はれる各巻の組織構造の究明を、中心的命題として、なさうとするものである。

かうした着眼と意図による研究は、既に拙著「金葉集の研究」に始まり、「詞花集の研究」を経て今日に至つたものであるが、「金葉集の研究」の主要目的が、金葉集全巻の構造の究明でなく、主として巻第一春歌を例にとり、初度・二度・三度と編纂が改められる過程を、なるべく刻明に跡づける点にあつて、全巻の組織構造の分析には及ばなかつた。その後の「詞花集の研究」においては、十巻本全体の構造を明らかにする意図のもとに、「金葉集の研究」における春歌の構造分析以上に、他の部立内部の構造をも明確にしたのであつた。しかし、十巻本の部立は、春・夏・秋・冬・賀・別・恋・雑に過ぎなく、古今集の如き二十巻本の部立の種類には及ばず、羇旅・物名・哀傷・雑体・大歌所御歌などの部立内部の構造の究明には至らなかつた。又、詞花集は、勅撰和歌集中、最も歌数の僅少な集で、古今集と共通してゐる部立においても、その構造は単純であつたので、詞花集の構造をそのまま古今集に適用して考へることには、不備な点があつた。その上、金葉集や詞花集やその他の勅撰集に一様に見られる部立の内部構造は、その端を古今集に発してゐるので、この源流に遡り、古今集全巻の構造を明白にする必要に迫られたからであつた。

今、ここに、古今集全巻の構造を、一応、明らかにすることを得たが、以後の勅撰和歌集乃至私撰和歌集、あるひは組織化された私家集などは、多かれ少なかれ、この古今集の構造の影響下に、自らを組織だててゐるのである。

構造を分析し、それを説明する場合に、「主題」といふ名称を止むを得ず使用したが、「主題」とは、個々の歌を、ある概念のもとに包括するための条件である。例へば、巻第一春歌上の巻頭から六首は、いづれも「立春」の歌である。古今集の本文中には、この六首を統括する標題としての「立春」といふ標記は見出されないが、撰者の心意の中には、さうした思考が存在した。かうした目に見えぬ包括概念を「主題」と称するので、それは抽象的な名称であ

る。このやうに、「主題」は、抽象化されてゐるが故に包括的であり、又、包括的であるためには、抽象化されてゐなければならないのである。

かうした「主題」的な観念は、排列過程において発現し、全巻に存在してゐるが、中でも四季・物名・恋・哀傷、あるひは、雑等の諸巻の組織化においては、偉大な効力を発揮した。この「主題」的観念は、一つの共通的性質を有する和歌の集団を整理するに、好都合な基準であるが、勅撰和歌集の撰述の場を離れた時には、歌合の題や、題詠の名目として用ひられることもあつた。「主題」といひ「題」と称する場合、その「主題」なり「題」なりが果す機能は、幾つかの同類的和歌を集約結合することで、古今集の「主題」的思考は、当時行なはれてゐた歌合や歌会等における「歌題」を、巧みに摂取して、部立内部の構造作製に利用したものとも考へられる。但し、「歌題」といはず殊更「主題」としたのは、必ずしも、「主題」が「歌題」と一致しない場合が存在するからである。

古今集の部立内部に、「主題」の存在を認めるならば、古今集内の和歌一首は、原作者の思考なり感情なりを表現してゐるとともに、撰者が意識した「主題」的性格をも、二重に背負ふ結果となる。例へば、先に例を取つた巻第一春歌上の巻頭の「立春」の主題中の一首、題不知・読人不知の「梅が枝に来ゐる鶯春かけて鳴けどもいまだ雪は降りつつ」は、たとへ、原作者が、「立春」の日の心情を詠出したものでなかつたとしても、古今集の撰者たちは、この一首を、立春の歌として認めてゐるのである。又、原作者も撰者も、ともに「立春」の歌とした場合には、この一首は、二重の意味で、「立春」の歌とされるのである。このやうに、古今集内の和歌は、原作者としての理解と、撰者としての解釈とを、二つながら、絶えず背負はされてゐることになる。従つて、古今集中の和歌一首を理解する場合

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com